

---

---

# □ オペラ

## 関根 礼子

華やかな話題や注目すべき公演、地道な成果などが数々あり、多層的で活気に満ちた2016年日本のオペラ界だった。2011年の東日本大震災による原発事故以来減少していた海外オペラの来日数に回復傾向はみられないが、いくつかの公演はそれぞれに完成され、成熟した舞台を楽しませてくれた。国内の取り組みも充実し、一昔前までのような内外の決定的な格差は少なくなった。自国ならではの地に足の着いたプロデュースにより、独自の存在意義と特性で対抗できるようになっている。これはオペラが特別な祝祭的催事としてだけでなく、日常的な文化として生活のなかに定着していく重要なプロセスに違いない。

海外団体ではウィーン・フォルクスオーパーが「メリー・ウイドウ」ほかで上質の娯楽を提供し、マリンスキー・オペラは「エフゲニー・オネーギン」等で作中人物の心理を掘り下げてドラマを緻密に表現。ウィーン国立歌劇場は「ワルキューレ」などで粒ぞろいの歌手陣と優雅さに力強さが加わった余裕たっぷりのオーケストラで高水準の舞台を堪能させた。ザルツブルク・イースター音楽祭は「ラインの黄金」を、簡易な演出のホール・オペラながら創意のある舞台を設定し、輝かしい芸術的成果で圧倒した。強豪の歌手陣に混じって藤村実穂子がフリッカで出演し、健在ぶりを示したのも特筆される。

国内唯一のオペラ常設館として年間を通してオペラを発信している新国立劇場は飯守泰次郎芸術監督のもと、安定した活動を続けた。「ローエンングリン」と「ワルキューレ」でワーグナーを堅実に固めたほか、ヤナーチェクに初めて取り組んで「イエヌーファ」を好演、閉鎖的な封建社会に生きる過酷な人生をドラマに即した美しい音楽で表現し、最後にほのかな希望を感じさせて感動的に幕を閉じた。「ウェルテル」や「アンドレア・シェニエ」での音楽の美しさやドラマの味わい深さも忘れ難い。定番の「魔笛」「サロメ」「夕鶴」「ラ・ボエーム」では、前回と同じ演出でも歌手は異なり、回を重ねるごとに違った味が出てくる面白さがある。同劇場では主役クラスの歌手には外国人の起用が多い一方、脇を固める日本人歌手の成長ぶりに感嘆させられることが少なくない。これら新国立劇場で育った歌手は目下、他の国内プロダクションで主役を担うケースが増えているが、今後は新国立劇場でも主役に登用されるだけの成長を期待したい。

東京二期会は「トリスタンとイゾルデ」や「ナクソス島のアリアドネ」「フィガロの結婚」などをしっかりした制作のもとに上演し、若手を含む多数の歌手たちが各自の持てる力を最大限発揮しうる場となった。なかでもイタリアの2劇場(バルマ、フェニーチェ)と提携した「イル・トロヴァトーレ」では、アンドレア・パッティストーニの指揮とロレンツォ・マリアーニの演出に背中を大きく押される形で好演し、海外団体かと見まがうばかりに立派な水準を獲得していた。

藤原歌劇団では前2015年のロッシーニに続き、ベルカントオペラの歌手が特に若い世代のなかに育っている。完成度の高い「愛の妙薬」では同団デビューの若手が初々しい歌唱を聴かせ、「カブレーティ家とモンテッキ家」ではロメオ役の向野由美子が精確で情感も豊かな見事な演唱で傑出していた。「ドン・パ

スクアレ」は、藤原歌劇団のほか日生劇場、びわ湖ホールなどの共同制作である。開催した劇場によって歌手、管弦楽などに差異があったようで、共同制作の利点を十分に生かすにはいま一步の感が残された。

もう一つの大規模な共同制作「さまよえるオランダ人」は東京二期会、神奈川県民ホール、びわ湖ホール、iichiko総合文化センター(大分)など全7団体によるもの。こちらも全公演に共通する部分と開催地による独自の部分(歌手、管弦楽など)が組み合わされて多少の違いはあっただろうが、単独の主催ではなかなかできない大型企画への挑戦であり、聴衆層を広げる意義も大きい。ミヒヤエル・ハンベの演出は映像を巧みに使って嵐の海や大きな船をスケール豊かに表現。眠り続ける舵手を常に舞台上に置き、最後にすべては舵手の見た夢だったと明かす。この夢設定については批判する意見も多かったが、筆者には面白く感じられた。女性の犠牲で救われるなど所詮夢なのであり、夢と知りつつ夢を楽しむ娯楽的な要素がワーグナーにもあっていいと思うからである。

こうした共同制作は、各地の公共ホールなどを巻き込むことで地域オペラの格差解消に貢献している。同時に、各地の劇場独自の制作にもいくつかみられるべきものがあり、もはや東京だけがオペラの発信地ではなくなっている。特に関西圏は、国立のオペラ劇場という中心的な柱が存在しない分、それぞれの地区の公立劇場が分散的に独自の発信を続けて意気が高い。たとえば兵庫県立芸術文化センターは佐渡裕芸術監督のもと、イギリスから演出家(アントニー・マクドナルド)と歌手10人らを招き、国内勢とあわせてプリテンの「夏の夜の夢」をファンタジー豊かに上演した。夜の静寂を美しく聴かせたオーケストラ(兵庫芸術文化センター管弦楽団)、粒ぞろいの歌手や妖精の子どもたちなど、適切に訓練されて高水準の舞台だった。地元西宮市で多くの観客を動員しただけでなく、他地域のどこに出しても通用する優れたプロダクションと思われた。

このほかびわ湖ホール、みつなかホール(兵庫県川西市)、河内長野市立文化会館(ラプリーホール)、なら100年会館などの公共ホールでオペラが重要な主催事業として継続された。大学の附属施設ながらユニークな実績を挙げている大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスや、いずみホール等の民間ホール、関西二期会、関西歌劇団、堺シティオペラなどの声楽家団体による活動を含め、関西圏全体を概観すると、方針も達成度もさまざまな、多様性に富んだオペラ活動が意欲的に混在していることがうかがえる。

全国に目を向けると、北海道から沖縄までいくつか注目すべき公演があった。中央からの巡演に加えて地域発信のオペラも定着。住民参加型市民オペラも健在で、在住専門家の絶対数や聴衆層の限られている地域では専門家と市民、行政との関係をどう推進するか多様な路線が試みられている。和歌山市民オペラ協会が浅草オペラ生誕100周年として上演したアイヒベルクのおベレッタ「アルカンタラの医者」は、舞台と客席が大いに沸き、地域オペラの一つの好例を示していた。

新しい演目では東京文化会館で日本初演されたベルギーの現代オペラ「眠れる美女」(クリス・デフォート作曲)が、あいちトリエンナーレの「魔笛」と共に、ダンスを音楽とほぼ互角なまでの存在感で採り入れた新しい表現形態をアピール。沖縄県南城市文化センター・シユガーホールで初演された中村透作曲「あちやーあきぬ島ー南島幻想曲」、名古屋のソプラノ歌手・石川能理子が制作・初演した倉知竜也作曲「雪おんな」なども注目された。